



Title	永田理事長を憶ふ
Author(s)	音代, 節雄
Citation	懷徳. 1927, 6, p. 107-108
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88772
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

次は今度御大患中の事卅八度以上の高熱が十日
餘りも持續致しますのに少しも御苦痛を仰せられ
ぬので或日、先生、先生は普通の人間とツクネ型
か違ひますのと御修養の爲にコンナ時には又普通
人とは違ひますものですねと申上しました時仰臥の
御顔面に微笑を浮べられ、お褒めに預り痛み入る、
と申された。

此おほめに預り痛み入るが、謹嚴一途の先生のお
口より出ましたのが到々聞きをさめで、又謹嚴な
一途を少しわやにしたる様に覺へましたが矢張謹
嚴な先生でした。

永田理事長を憶ふ

十二三年前の事、大正天皇御即位の大典を京都
に擧げさせられ、大阪は全市をあげて踊り廻つて

永田理事長を憶ふ

五月廿日午前烏瀉病院の御一室で謹嚴其のも
の、様な口調懷徳堂段上御講義の時と少しも變
らない音調で、眉目一つ動かぬ普通の態度で懷
徳堂の諸彦には非常に厄介に相成つた、實に徹
底せる親切有難くて涙コボル、有難いと此御言
葉が先生より賜りたる最後のもので有つた。
ドコまでも謹嚴な先生で有つた多年御講義を拜
聽して居りましたが導て頂いても

まねも出来ない御人格

(二一、六、二八)

音代節雄

ゐた前後の年である。高津溝の側の永田さんの
貸家をお借りしてゐたとき、豊田さんの令嬢が

加賀正太郎さんと結婚せらるゝ日であつたとおぼえてゐる。自分はまだ子供であつたが、其時はじめて車上の永田氏を見かけた。これが永田理事長に對する自分の最初の印象であつた。其時は懷徳堂がまだ出來てゐなかつたと思ふ。其後枚方に轉居して縁あつて懷徳堂の門を夜々くぐるやうになつて、懷徳堂の理事長が永田さんであることを知つた。永田さんの近所では、永田さんと呼ぶに『結構な人』といふ其結構と通俗にいふ言語の中には徳望ある人といふ意を寓してゐるのである。近所の人で永田さんをはめぬ人はない。子供心に近所の人の話を聞いたが、先代はかね筋で米屋をしてゐられたといふことであるが、若し違つてゐたら許されたい。其當時より考へて、永田さんの

出世は近所の人の異口同音に驚く事であつた。またこれも近所に住んだ人の言であるが、『あんな結構な人でも疊の上で死なれない』と。此言葉は味ふべきである。善を施し隣人に敬はれてゐられた永田氏を惜しむ心は此言葉となつて現はれた。實業界の長老として、活躍せられた永田氏は、懷徳堂のみならず、大阪の爲に惜しい人である。

吾等懷徳堂に學ぶ者、其頭を失ひ、茫然としてゐる。懷徳堂は何か故に禍せられるのであるか、聖人の道を教ふる懷徳堂が永田理事長、松山博士等首腦を續いて失ふとは何の因果であるか。天は聖人の道を究むることに何故障害を與ふるや。